

こんにちは。嘱託員の村上です。



渋沢栄一
(『近世名士写真 其2』、
国立国会図書館ウェブサイトより)

4月9日、2024年度から使われる新しい紙幣のデザインが発表されましたね。1万円札の肖像画には第一国立銀行の設立などに関わった渋沢栄一が選ばれました。渋沢は青森銀行の前身である第五十九国立銀行の設立にあたって旧弘前藩士族を指導したり、三本木渋沢農場(現十和田市)を経営したりと青森県と深い関わりを持つ人物で、青森市を訪れたこともあります。

デジタル版『渋沢栄一伝記資料』(公益財団法人渋沢栄一記念財団)によると、渋沢は明治41年(1908)8月12日、同年9月1日、大正6年(1917)10月17日に青森市を訪れています。

明治41年8月12日は家族とともに北海道へ向かう途中、青森駅で列車を降りて連絡船に乗り換えるまでの間、中村楼で休憩をとりました。そして、北海道から東京へ戻る途中の9月1日に再び青森市を訪れました。

正午に青森駅へ到着した渋沢は青森商業会議所の川田水穂書記長の案内で青森製材所(明治39年に操業を開始した全国初の官営製材所)や合浦公園を見学しました。夜は浜町(現本町)の金森楼で開かれた歓迎会に出席し、演説を行いました。

この演説で渋沢は青森市の産業について林業を発展させなければならないと語り、それに伴う製材業が官営であることに疑問を投げかけました。また、市内を見学して煙突が見えなかったことに触れ、工業を起こすことの必要性を説きました。短時間の滞在ではありますが、市内を見学しながら青森市の発展について思いを巡らせていたようです。

一方、大正6年の訪問は新潟県の第六十九銀行(北越銀行の前身)の本店新築落成式出席をきっかけとするものでした。渋沢はこの式に合わせて東北を巡回する旅を計画し、視察や講演を行いました。

10月17日午後4時、青森駅に到着した渋沢は、旅館で休憩した後、青森市公会堂で開催された歓迎会に参加しました。この会には官民の有志約250名が参加したそうです。

そして翌日、午前10時から青森市公会堂で講演会を行いました。会場には800人以上の傍聴者が集まり、満員のため入れない人もいたといえます。この会で渋沢は青森県の産業が東北6県の中でも下位にあると指摘し、気候は寒冷だが寒冷の国が必ずしも発展しないわけではないと語りました。そして、「青森県を進歩せしむるものは即ち諸君であります」と述べ、集まった市民を激励しました。この講演からも青森市の発展に対する渋沢の思いが感じられますね。

※今回の内容は『東奥日報』(明治41年9月5日付、大正6年10月19日付)などを参考にしました。